

宮崎市文化財調査報告書 第117集

なが お い せき  
永 尾 遺 跡  
(1区・4区・6区)

西春田仲間原線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2017

宮崎市教育委員会



宮崎市文化財調査報告書 第117集

なが お い せき  
永 尾 遺 跡  
(1区・4区・6区)

西春田仲間原線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2017

宮崎市教育委員会



永尾遺跡調査区写真（写真内の文字は調査区）

## 序 文

宮崎市は、太陽と緑豊かな宮崎県の県都として、日々発展を続けています。市内では様々な開発事業が行われていますが、それに伴ってやむなく消失する埋蔵文化財もあります。その場合は発掘調査が行われますが、その過程で宮崎市の歴史を解明する、新たな成果も得られています。

今回調査された永尾遺跡は宮崎市の北部にあります。畑地の広がる台地上に、市道の拡幅や農道の新設に伴い、6つの調査区が発掘調査されました。その結果、今から3万年以上前の旧石器時代から縄文時代、古墳時代、近世の人たちが生活した痕跡を確認することができました。

石を割って槍の先に仕上げた石器、丁寧に陥し穴を掘って動物を捕らえようとした跡、礫を集めて獲物を食糧にした跡、調理のために作られた土器、住処を作るために木を倒すための石斧。地面から出土した遺物からは、自然と共に力強く生きた当時の人々の生活を窺うことができます。現代に生きる私たちは、工事によりなくなった遺跡と引き換えに、これらの調査成果を未来へと残してゆかねばなりません。

永尾遺跡の発掘調査は、発掘作業に携った作業員の方々や、調査にご理解いただいた周辺住民の方々のご協力により実施することができました。末尾ではございますが、この場を借りまして、心よりお礼申し上げます。

平成29年3月

宮崎市教育委員会

教育長 二見 俊一

# 例 言

1. 本書は、西春田仲間原線道路改良事業に伴う、宮崎県宮崎市佐土原町上田島に所在する永尾遺跡の発掘調査報告書である。

2. 本事業は、佐土原総合支所建設課より依頼を受け、宮崎市教育委員会文化財課が実施した。発掘調査、整理事業は以下の手続きを経て実施した。

(平成25年度)

- |         |                        |              |
|---------|------------------------|--------------|
| 1区：進達依頼 | 平成25年1月24日             | (宮佐建第153号)   |
| 伝達文書    | 平成25年2月2日              | (0850-7-727) |
| 発掘調査    | 平成25年5月7日～平成25年5月17日   |              |
| 着手報告    | 平成25年5月10日             | (宮教文第113号)   |
| 完了報告    | 平成25年5月21日             | (宮教文第148号)   |
| 発見通知    | 平成25年5月22日             | (宮教文147号)    |
| 保管証     | 平成25年5月31日             | (宮教文第147号2)  |
| 整理事業    | 平成25年7月16日～平成25年8月9日   |              |
| 4区：進達依頼 | 平成25年9月20日             | (宮佐建第82号)    |
| 伝達文書    | 平成25年10月3日             | (0850-7-136) |
| 発掘調査    | 平成25年11月5日～平成25年12月25日 |              |
| 着手報告    | 平成25年11月27日            | (宮教文1063号)   |
| 完了報告    | 平成26年1月6日              | (宮教文第1165号)  |
| 発見通知    | 平成25年12月26日            | (宮教文第1153号)  |
| 保管証     | 平成26年1月14日             | (宮教文第1178号)  |

(平成26年度)

- |         |                        |             |
|---------|------------------------|-------------|
| 6区：進達依頼 | 平成26年5月8日              | (宮佐建第35号)   |
| 伝達文書    | 平成26年5月16日             | (0850-7-33) |
| 発掘調査    | 平成26年8月19日～平成26年10月24日 |             |
| 着手報告    | 平成26年9月3日              | (宮教文第235号3) |
| 完了報告    | 平成26年11月10日            | (宮教文第235号5) |
| 発見通知    | 平成26年10月30日            | (宮教文第235号4) |
| 保管証     | 平成26年11月17日            | (宮教文第235号6) |
| 整理事業    | 平成26年9月22日～平成27年3月25日  |             |

(平成27年度)

- |      |                       |  |
|------|-----------------------|--|
| 整理事業 | 平成27年5月19日～平成28年2月29日 |  |
|------|-----------------------|--|

3. 調査組織

調査主体 宮崎市教育委員会 文化財課

(平成25年度)

発掘調査(1区)・整理事業

文化財課	課長	橋口 一也
調査総括	副主幹兼副課長	島田 正浩
調査事務	主任技師	秋成 雅博
調査・整理担当	嘱託員	川野 誠也
	嘱託員	菊地ひろみ

発掘調査(4区)

文化財課	課長	橋口 一也
調査総括	副主幹兼副課長	島田 正浩
調整担当	主任技師	秋成 雅博

調査事務主任主事	谷口 広清
調査担当嘱託員	大嶋 昭海

(平成26年度)

発掘調査 (6区)			
文化財課 課長	橋口 一也		
整理総括 課長	島田 正浩		
調査担当 主任主事	秋成 雅博		
調査事務主任主事	谷口 広清		
調査・整理担当 主査員	金丸 武司		
	川野 誠也		

(平成27年度)

整理作業 (4区・6区)			
文化財課 課長	日高 貞幸		
整理総括 主任技師	井田 篤		
調整担当 主任主事	河野 裕次		
整理事務主任主事	谷口 広清		
整理担当 主査員	金丸 武司		
	小野 貞子		

(平成28年度)

整理作業			
文化財課 課長	日高 貞幸		
整理総括 課長	井田 篤		
調整担当 主任技師	河野 裕次		
整理事務主任主事	武富 知子		
整理担当 主査員	金丸 武司		
	川野 誠也		
	大嶋 昭海		
	小野 貞子		

4. 現地における測量はトータル・ステーションを用いて行い、個別の遺構実測図は1/10・1/20で作成した。また個別の写真はブローニ及び35mmのモノクロ・リバーサルフィルム・デジタルカメラで撮影した。
5. 空中写真撮影は布スカイサーベイ九州に業務委託した。
6. 本書に掲載した遺物の実測・トレースは金丸・川野・菊地・小野及び室内整理作業員が行った。
7. 本書で使用する土色の表記は『新版 標準土色帳』に依拠した。
8. 本書で使用する北は、全て真北である。
9. 図中のアミ部分は磨面を示す。また、黒塗りはガジリを示す。
10. 出土遺物及び掲載図面・写真、記録等は宮崎市教育委員会が保管している。
11. 本書の執筆は、第Ⅰ章：金丸、第Ⅱ章は第1節（1区）：川野、第2節（4区）：大嶋、第3節（6区）：金丸、第Ⅲ章：金丸が行った。なお編集は金丸が行った。

# 目 次

## 本文目次

第Ⅰ章 はじめに	1
第1節 遺跡の立地	1
第2節 遺跡の歴史的環境	1
第3節 調査に至る経緯	4
第Ⅱ章 調査の成果	5
第1節 1区の調査	5
第1項 調査の概要	5
第2項 基本層序	5
第3項 縄文時代	5
第4項 古墳時代	6
第1目 検出遺構	6
第5項 小 結	7
第2節 4区の調査	9
第1項 調査の方法と概要	9
第2項 基本層序	10
第3項 縄文時代	12
第1目 検出遺構	12
第2目 出土遺物	14
第4項 小 結	17
第3節 6区の調査	18
第1項 調査の概要	18
第2項 基本層序	18
第3項 縄文時代早期の調査	18
第1目 検出遺構	18
第2目 出土遺物	25
第4項 縄文時代早期以降	27
第5項 小 結	27
第Ⅲ章 総 括	29



## 挿図目次

第1図	調査区周辺遺跡分布図	2	第13図	4区Ⅳ・Ⅴ層出土遺物実測図(1)	14
第2図	調査区位置図	3	第14図	4区Ⅳ・Ⅴ層出土遺物実測図(2)	15
第3図	1区土層柱状模式図	5	第15図	6区周辺地形図	19
第4図	1区遺構分布図	5	第16図	6区遺構分布図	19
第5図	1区遺構実測図	6	第17図	6区遺構実測図	20
第6図	1区出土遺物実測図	7	第18図	6区SI1内出土遺物実測図	20
第7図	4区周辺地形・トレンチ配置図	9	第19図	6区Ⅳ・Ⅴ層出土遺物実測図(1)	21
第8図	4区土層断面図	11	第20図	6区Ⅳ・Ⅴ層出土遺物実測図(2)	22
第9図	4区SI1実測図	12	第21図	6区Ⅳ・Ⅴ層出土遺物実測図(3)	23
第10図	4区SI1出土遺物	12	第22図	6区Ⅳ・Ⅴ層出土遺物実測図(4)	24
第11図	4区遺構分布図	13	第23図	6区Ⅳ・Ⅴ層出土遺物実測図(5)	25
第12図	4区Ⅴ層遺物・礫出土状況	13	第24図	6区攪乱層出土遺物実測図	26

## 表図版

第1表	1区出土土器観察表	8	第4表	4区出土土器観察表	16
第2表	1区出土土器観察表	8	第5表	6区出土土器観察表	28
第3表	4区出土土器観察表	16	第6表	6区出土土器観察表	29

## 写真図版

図版1	1区 調査区全景 SA1・SA2 完掘写真	31
図版2	1区 調査区全景 出土遺物	32
図版3	4区 調査区全景 調査区東壁 調査区南壁 Ⅴ層下位の土層断面	33
図版4	4区 Ⅴa層遺物および礫出土状況 Ⅴb層礫出土状況 SI1検出状況 SI1周辺散礫 搬入礫出土状況 調査風景 調査区完掘状況	34
図版5	4区 縄文時代早期土器 縄文時代早期石器	35
図版6	6区 調査区全景 調査区土層断面 Ⅲ層検出状況	36
図版7	6区 Ⅴ層集石遺構検出状況 調査区北壁(東部)土層断面 調査区北壁(西部)土層断面	37
図版8	6区 縄文時代早期出土土器 縄文時代早期出土石器	38
図版9	6区 縄文時代早期出土土器 縄文時代早期以降出土土器	39



## 第1章 はじめに

### 第1節 遺跡の立地

宮崎市の北部に位置する佐土原町は、宮崎層群と呼ばれる堆積層が隆起し浸食を受けた丘陵部と、浸食された宮崎層群が水性作用によって流下して形成された平野部と、流下中の宮崎層群によって形成された微高地に三分される。

今回調査が行われた永尾遺跡は宮崎市佐土原町の北西部にあり、地形的には丘陵部に属する。遺跡の立地する台地は仲間原台地と呼ばれる。標高は100mであり、佐土原町で最も標高が高く、かつ最も広い台地である。

永尾遺跡は仲間原台地の北部にあたる。現在では平坦な畑地が広がっているが、1980年代前半に大規模な造成が行われる前には丘が存在し、周囲が緩やかに傾斜する地形が存在していた。現在、当時の丘は削平され、仲間原地区共同墓地となっている。

事業地のうち1区は仲間原地区公民館の駐車場部分に当たるが、それ以前は畑地であったことが調査区内から検出されたトレンチャーから窺うことができる。このトレンチャーは、長年畑地として利用された4区からも確認されている。一方6区は、宅地の庭として利用されたため、アカホヤ火山灰層上面以下は後世の影響を受けなかった。

### 第2節 遺跡の歴史的環境

永尾遺跡の立地する仲間原台地から石崎川を隔てた南岸に立地する船野台地は、旧石器時代～縄文時代にかけての遺跡が密集する場所である。

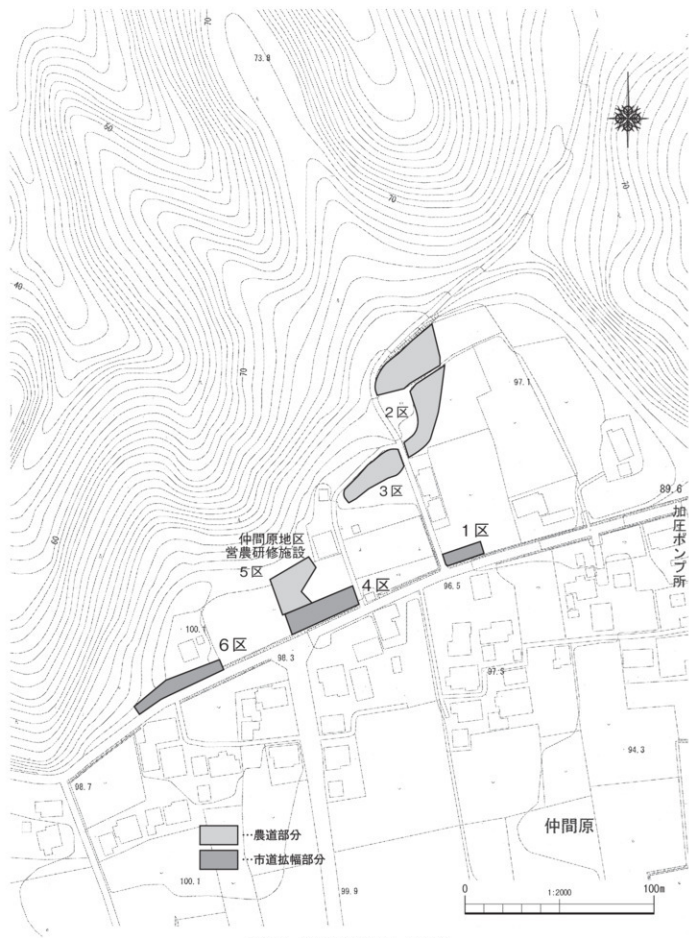
1974年、船野台地に立地する船野遺跡（現・南学原第1・第2遺跡）は別府大学による発掘調査が行われ、ナイフ形石器や細石器が出土した。調査を担当した橘昌信は、出土した細石刃核を「船野型細石刃核」と設定した。

1994年、金丸武司は船野台地から仲間原台地にかけて表面採集を行った。この時、別府原第2遺跡西側の丘陵より、断面三角形を呈し局部磨製を行う「神子柴型石斧」を採集した。

平成に入ると、船野台地や仲間原台地は東九州自動車道の計画区域となり、工事に先駆けて宮崎県埋蔵文化財センターによる発掘調査が実施された。仲間原台地で発掘調査された遺跡としては、永尾遺跡の西方にあたる別府原遺跡が代表的である。出土遺物は旧石器時代で3つの時期に分けられ、うちⅠ期は始良Tn火山灰下位にあたり、礫群5基に伴い剥片類が、Ⅱ期は始良Tn火山灰上位～小林降下軽石下位にあたり、礫14基に伴いナイフ形石器等が、Ⅲ期は小林降下軽石上位にあたり、土坑4基、配石遺構2基に伴い細石器類が確認された。また旧石器時代終末～縄文時代草創期にあたる陥し穴状遺構が19基、縄文時代早期の遺構としては、集石遺構が48基、炉穴が307基検出されたほか、大量に出土した土器は縄文時代早期前葉に宮崎を中心に出土する「別府原式土器」と設定されるなど、南九州を代表する先史時代の遺跡と位置付けられている。



第1図 調査区周辺遺跡分布図 (S=1/10000)



第2図 調査区位置図 (S=1/2000)

東九州自動車道に伴う発掘調査は船野台地でも実施され、ナイフ形石器文化期と細石器文化期の文化層を確認した上ノ原遺跡や、炉穴や集石遺構と縄文時代早期の遺構を多く確認したほか、中期の船元式土器や晩期黒川式土器も出土した下屋敷第2遺跡が調査されている。

平成24年度には、市単農道の拡幅に伴い、船野台地の下屋敷第1遺跡が宮崎市教育委員会により調査され、角錐状石器や石器製作に関わる石器群が出土したほか、縄文時代早期の無文土器等が出土した。

### 第3節 調査に至る経緯

平成24年度、佐土原総合支所建設課より、西春田仲間原線道路改良事業に伴う埋蔵文化財の照会があった。事業地は周知の埋蔵文化財包蔵地「永尾遺跡」の域内にあたることから、平成24年12月17日～同年12月27日に確認調査を実施し、縄文土器や焼礫、古墳時代の堅穴建物を確認した。開発原因が道路であることから、工事に当たっては事前に文化財の取扱が必要と判断した。協議を重ねた上で、平成25年5月7日～同年5月17日にかけて本調査を実施した。これが1区である。なお、7月～8月にかけて出土遺物を対象に整理作業も実施した。

上記事業に併行して、宮崎市教育委員会は宮崎県中部農林振興局による農道基幹整備事業に伴い予備調査を実施し、埋蔵文化財が確認された区域について本調査を実施した。この時調査されたのが2区・3区である。更に、平成26年度5月～8月にも同事業に伴う発掘調査を実施した。これが5区である。

さて、西春田仲間原線道路改良事業による市道の拡幅は1区の西側まで広がることから、宮崎市教育委員会は平成25年5月29日～同年6月13日と平成25年11月1日に確認調査を実施した。畑地及び西側の宅地まで埋蔵文化財が包蔵されていることを確認した。その後佐土原総合支所建設課と協議を行い、平成25年11月6日～同年12月25日にかけては4区の、平成26年8月19日から同年10月24日にかけては6区の発掘調査を実施した。

また、平成27年度には4区・6区で出土した遺物に対し整理作業を実施した。

#### (参考文献)

- 宮崎県埋蔵文化財センター編 2002 『下屋敷遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書  
宮崎県埋蔵文化財センター 第56集
- 宮崎県埋蔵文化財センター編 2002 『上ノ原遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書  
宮崎県埋蔵文化財センター 第58集
- 宮崎県埋蔵文化財センター編 2002 『別府原遺跡 西ヶ迫遺跡 別府原第2遺跡』  
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書  
宮崎県埋蔵文化財センター 第61集
- 宮崎市教育委員会編 2015 『下屋敷第1遺跡』宮崎市文化財調査報告書 宮崎市教育委員会 第104集
- 小谷桂太郎・金丸武司 1994 『宮崎平野の旧石器時代遺物』ちかたび 第35号

## 第II章 調査の成果

### 第1節 1区の調査

#### 第1項 調査の概要

永尾遺跡1区は永尾遺跡内の東端に位置する。調査区内の地形は変化に乏しく、ほぼ平坦で調査対象面積は55㎡である。調査はまず、バックホウにより表土を除去するところから開始した。現地表面から30cm程下げたところでアカホヤ火山灰層の残存を確認し遺構検出作業を行った。その結果、竪穴建物2基が検出され、古墳時代の遺物を確認したため、その後は人力にて掘削作業を行った。人力での掘削が終了した時点でトータルステーションを使用し、記録作業を行った。写真撮影は35mmモノクロ・リバーサル写真およびデジタルカメラを併用し記録した。また確認調査と先行トレンチ掘削の際、縄文時代の遺物が表採されていたため、調査区の北東端にサブトレンチを設定し掘削を行ったが縄文時代の遺構および遺物は認められなかった。

#### 第2項 基本層序

永尾遺跡の基本層序は既報の2区・3区・5区の報告書で示されている（以下、既報層序とする）。1区の基本層序も基本的に同一であるが、既報層序と異なる部分に関しては適宜記述した。以下、永尾遺跡の1区の基本層序である。

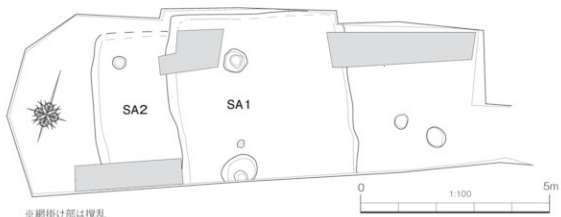
Iは表土層である。締まりは弱い（既報層序I層）。IIはアカホヤ火山灰層で、締まりはやや強い。遺構検出面の層である（既報層序III層）。IIIは火山マメ石層である。締まりは強く粘性は弱い。IVは締まりはやや強く粘性がある黒色土の層である（既報層序IV層）。Vは、締まりが強く粘性はない黒褐色のシルト質土層である（既報層序V-a層）。VIは、締まりはやや強く粘性がある暗褐色のシルト質土層である（既報層序V-b層）。VIIは小林降下軽石を含むローム層である（既報層序VI層）。

#### 第3項 縄文時代

今回の調査中には、縄文時代のものと考えられる遺構は検出されなかった。しかし、表面採

I. 表土 (0.3m)
II. アカホヤ火山灰層 (0.1m)
III. マメ石層 (0.15m)
IV. 黒色土層 (0.15m)
V. 黒褐色土層 (0.2m)
VI. 暗褐色土層 (0.2m)
VII. 小林降下軽石層

第3図 1区土層柱状模式図



第4図 1区遺構分布図 (S=1/100)

集や遺構検出作業中に縄文時代のものと考えられる遺物が確認されていたこと、隣接する他の調査区（2区～6区）で縄文時代の遺構や遺物が検出、出土していることから、本調査区でも縄文時代の項目を設けた。

1は打製石斧である。他にスクレイパー1点（19）、石核1点（20）、剥片石器2点（21・22）が調査区の周辺で表採することができたため、表と写真での掲載とする。

#### 第4項 古墳時代

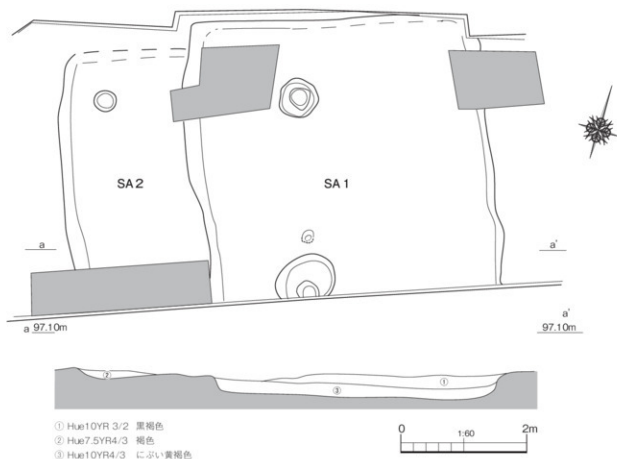
##### 第1目 検出遺構

###### 竪穴建物1

SA1 調査区中央に位置し、南側の一部が調査区外に及んでいた。牛蒡栽培用トレンチャーによる攪乱のため残存状態は芳しくないが、残っている平面規模は、東西軸が4.72m、南北軸が4.33mのおおむね方形の竪穴建物である。遺構埋土からは古墳時代中期～後期初めと思われる遺物（2～18）が出土した。

###### 竪穴建物2

SA2 調査区の中央西側に位置し、遺構の東側をSA1に切られている。牛蒡栽培用トレンチャーにより残存状態は芳しくないが、残っている平面規模は東西軸が2.01m、南北軸が3.48mの竪穴建物である。遺物は出土していないため、遺構の時期を特定することは難しいが、SA1に切られていることからSA1よりも古い遺構と考えられる。

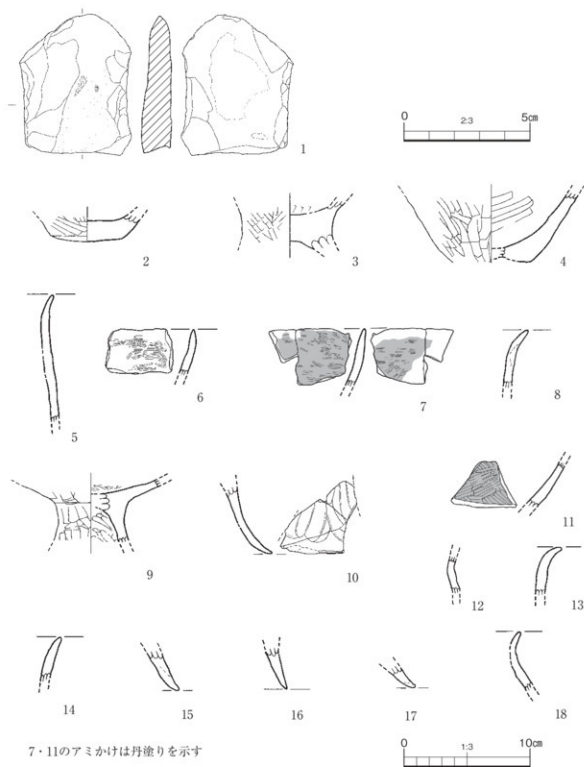


第5図 1区遺構実測図（S=1/60）



## 第5項 小 結

今回の調査では、主な遺構として2軒の竪穴建物が検出され、出土した遺物のほとんどが古墳時代中期～後期初めにかけてのものであった。永尾遺跡の他調査区では古墳時代の資料がほとんど確認されていないため、今後、古墳時代に留意した調査を心掛ける必要がある。



第6図 1区出土遺物実測図 (1:S=2/3, 2~18:S=1/3)

第1表 1区出土土器観察表

頁 番号	回 番号	掲載 番号	出土 遺構	器種	部位	色 調		調 整		焼成	胎土 (上: mm, 下: 量)					備考		
						外面	内面	外面	内面		A	B	C	D	E			
7	6	2	SA1	甕	底部	にぶい赤褐 10YR7/4	黒褐 2.5YR3/1	工具ナデ ナデ	工具ナデ ナデ 指おさえ	良好	2 多							
		3	SA1	甕	底部	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	工具ナデ	指おさえ	良好	5 多	2 少					外面風化	
		4	SA1	甕	胴部～ 底部	にぶい赤褐 5YR5/4	にぶい赤褐 5YR5/3	工具ナデ	ハケ目 ナデ	良好	3 少						底部に幅 4mmの棒 状圧痕あり	
		5	SA1	甕	口縁部 ～胴部	浅黄橙 7.5YR8/6	黄橙 10YR8/6	ナデ	ナデ	良好	3 多	1 微量						
		6	不明	環?	口縁部	明黄褐 10YR7/6	明黄褐 10YR7/6	ナデ	ミガキ	良好	1 少	1 少						
		7	SA1	壺?	口縁部	にぶい赤褐 5YR5/4	にぶい赤褐 5YR5/3	斜め・横方 向のミガキ	斜め・横方 向のミガキ	良好	1.5 微量	1 多						丹塗り
		8	SA1	甕	口縁部	橙 2.5YR6/6	明黄褐 7.5YR8/6	ナデ	ナデ	良好	3 多							
		9	SA1	高環	環底部 ～胴部	橙 7.5YR6/6	暗灰黄 10YR6/6	工具ナデ	ハラミガキ 工具ナデ後 指ナデ	良好		1 多						
		10	SA1	高環	胴部	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	工具ナデ後 に指ナデ	丁寧なナデ	良好	2 多						透かし	
		11	SA1	高環	環部	橙 7.5YR6/6	橙 2.5YR6/6	ナデ	斜め方向の ミガキ	良好		1 多					丹塗り	
		12	SA1	甕	口縁部	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR6/6	ナデ	ナデ	良好	4 多	3 少						
		13	SA1	甕	口縁部	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	指おさえ ナデ	ナデ	良好	4 多	1 微量					煤付着	
		14	SA1	甕	口縁部	明黄褐 10YR7/6	橙 7.5YR7/6	ナデ	ナデ	良好	4 多							
		15	不明	高環	胴部	黄橙 7.5YR7/8	黄橙 7.5YR7/8	ナデ	ナデ	良好	2 多	2 多						
		16	SA1	高環	胴部	橙 7.5YR7/6	橙 7.5Y7/6	ナデ	ナデ	良好	2 多		1 個					
		17	SA1	高環	胴部	明黄褐 10YR7/6	橙 5YR6/6	工具ナデ ナデ	工具ナデ ナデ	良好	1 多	1 個						
		18	SA1	壺?	口縁部	にぶい黄褐 10YR7/4	浅黄橙 10YR8/4	ナデ	ナデ	良好	5 多		1 個					

※胎土 A: 宮崎小石 B: 長石・石英 C: 輝石・角閃石 D: 雲母 E: バミス

第2表 1区出土土器観察表

頁 番号	回 番号	掲載 番号	出土 遺構	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
7	6	1	不明	打製石斧	頁岩	5.7	4.5	1.2	41.93	
		19	不明	スクレイパー	ホルンフェルス(1)	9.5	7.4	3.0	250.0	
		20	不明	石核	流紋岩	6.7	12.0	4.2	370.0	
		21	不明	剥片	黒曜石	2.1	1.8	0.5	1.5	
		22	不明	剥片	黒曜石	2.1	1.0	0.7	1.4	

・ホルンフェルス(1): 表面の色調は黒味または灰褐色であり、粒子が粗いもの  
 ・ホルンフェルス(2): 表面の色調は褐色または灰褐色であり、磨滅の著しいもの

## 第2節 4区の調査

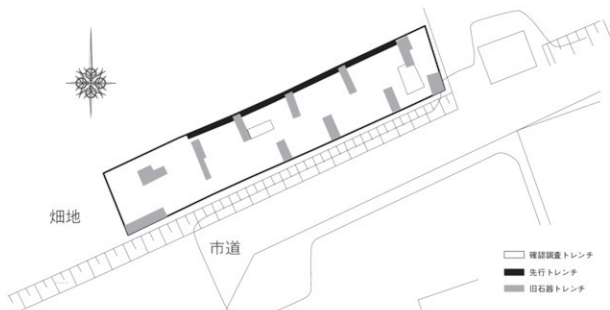
### 第1項 調査の方法と概要

永尾遺跡4区の調査は、平成25年11月5日～平成25年12月25日の期間に実施した。調査対象面積は258㎡である。調査は、基本的に全ての遺物・礫をトータルステーションでとりあげ、座標と標高を記録した。集石遺構平面図は1/10で記録し、東西南北壁の土層断面図を1/20で記録した。写真撮影は、35mmモノクローム・リバーサル写真およびデジタルカメラを併用し記録している。

表土剥ぎは重機を用い、11月5日～11月8日の4日間でおこなった。11月11日からは人力によって、部分的に残存していたアカホヤ火山灰層上面における遺構検出、調査区北側壁面沿いの先行トレンチを掘削した。結果、アカホヤ火山灰層上面における遺構は確認できず、調査区全面を縄文時代早期の包含層上面で揃えた。確認調査と先行トレンチ掘削の所見から、縄文時代早期層はⅣ層・Ⅴa層・Ⅴb層の3層に分かれることが想定されたので、上層で遺物・礫・遺構の記録をおこない、順次下位の包含層の掘削をおこなった。Ⅳ層はトレンチャーによる撓乱が著しく上面における遺構は確認できなかったが、Ⅴa層で集石遺構1基および散礫・遺物が出土した。Ⅴb層では遺物・礫はほとんど出土せず、11月27日にはⅥ層（小林降下軽石層）上面までの掘削作業が終了した。なお、コンターラインはⅥ層上面で記録している。

11月28日からは、排土置場に用いて未掘削であった調査区西側を重機により拡張して掘削した。調査区西側は東側よりやや標高が高く、耕作によって縄文時代早期の包含層の上層が大きく削平されていたことから、ほとんど遺物・礫は検出されなかった。

Ⅵ層以下については、Ⅵ層上面で遺構検出した後に旧石器の確認のためトレンチを11本設定して掘り下げたが、遺物・遺構は確認されなかった。12月20日には調査区の埋め戻しを開始した。12月24日には埋め戻しが完了し、全ての調査行程を終了した。



第7図 4区周辺地形・トレンチ配置図 (S=1/400)

## 第2項 基本層序 (第8図)

永尾遺跡4区は、調査前は畑として利用されており、地形の平坦化と牛蒡栽培用トレンチャーによって大きく削平および攪乱されている状態であった。調査の結果、旧地形は西側から東側にかけて緩やかな傾斜を呈し、調査区南東方向に落ち込んでゆく緩やかな谷地形であったことが判明した。したがって、農地利用による平坦化および攪乱の影響は、基本的には標高が高い西側に顕著にみられ、東側ではⅢ層より上位が、西側ではVb層より上位が削平されている。

永尾遺跡の基本層序は既報の2区・3区・5区の報告書で示されている(以下、既報層序とする)。4区の基本層序も基本的に同一であるが、既報層序と異なる部分に関しては適宜記述した。以下、各層の概略を述べていく。なお、詳細な土質については第8図の注記を参照。

**I層**：表土層：既報層序I層

**II層**：耕作土：既報層序I層

トレンチャーに巻き上げられたアカホヤ火山灰層および遺物が多く混じる。いわゆる表土の範疇に入るが、便宜上分別した。既報層序II層である黒色シルト質層とは異なる。

**III層**：褐色土(7.5YR6/8)：既報層序III層

アカホヤ火山灰層である。火山豆石は確認されていない。旧地形で標高が低い調査区東側および南側で部分的に検出された。残存している部分もトレンチャーの攪乱を著しく受けており詳細は不明であるが、削平前は4区全面に堆積していたと考えられる。

**IV層**：黒色土(10YR7/1)：既報層序IV層

極小の白色粒や灰褐色粒を含むシルト質土。既報層序のIV層は縄文時代早期の遺物包含層であるが、本調査区で遺物の出土はなかった。もっともトレンチャーの攪乱が著しく、Va層上面出土の遺物と明確に区別できていない可能性もある。

**Va層**：黒褐色土(10YR2/3)：既報層序Va層

硬質でしまりが強い、極小の白色粒や灰白色粒を含む。調査区東側に良好に堆積しており、西側は削平を受けている。縄文時代早期の包含層であり、焼礫も含め遺物の多数が本層から出土した。

**Vb層**：黒褐色土(10YR3/2)：既報層序Vb層

基本的な土質はVa層と同じであるが、より色調が明るい、灰白色粒をあまり含まない、粘性・しまり共にVa層より強いなどの特徴をもつ。遺物・礫の出土はほとんどない。

**VI層**：暗褐色土(10YR3/4)：既報層序VI層

小林降下軽石層である。しまり非常に強い。黄褐色・白色パミスを非常に多く含む。軽石の多寡としまりで2層に分層が可能であり、上層に比べ下層の方が軽石の量およびしまりが強くなる。遺物・礫の出土はない。

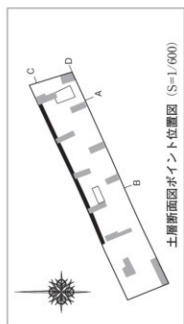
**VII層**：暗褐色土(10YR3/3)：既報層序VI層の下位層

粘性あり、しまりが著しく弱い。既報の2区、3区では旧石器時代の包含層であるが、4区では遺物および礫の出土はなかった。標高の高い西側へ行くほど堆積が薄い。

**VIII層**：褐色土(7.5YR4/4)

粘性あり。しまりは弱い。既報層序との対応関係は不明であった。

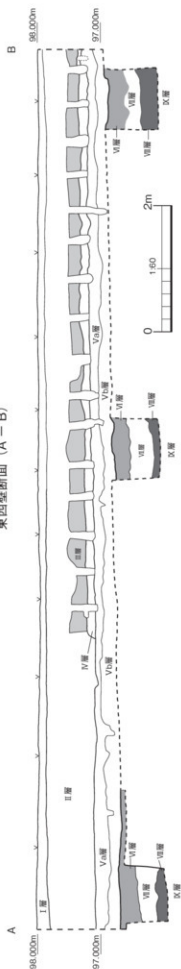
**IX層**：明褐色土(7.5YR5/8)：既報層序X層またはXII層



南北壁断面 (C-D)



東西壁断面 (A-B)



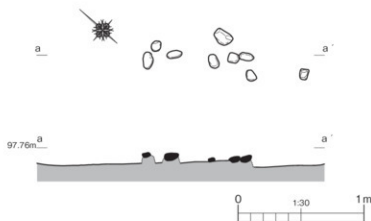
I層 赤土  
II層 材土  
III層 棕色土 (7.5YR5/6)  
IV層 黒色土 (10YR7/1)  
Va層 黒褐色土 (10YR2/3)  
Vb層 黒褐色土 (10YR3/2)

VI層 暗褐色土 (10YR3/4)  
VII層 暗褐色土 (10YR3/3)  
VIII層 褐色土 (7.5YR4/4)  
IX層 明褐色土 (7.5YR5/8)

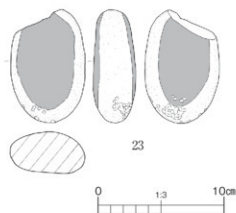
III~IV層の土を多く含む。  
粘性弱く、しまりあり。アカホヤ火山灰の2次堆積層。火山灰石は層間で  
きいてない。  
粘性弱く、しまり弱い。極小の白色粒。灰白色粒を含む。  
粘性弱く、しまり強い。2mm以下の灰白色粒を多く含む。1mmの褐色パミ  
を含む。  
粘性弱く、しまり強い。Va層より粘性、しまり共に強く、色調が明るい。  
土の含有物は同層であるが、色調が明るく灰白色粒はほとんど含まない。

粘性あり、しまり非常に強い。小林落下軽石層。黄褐色パミス、白色粒を  
非常に多く含む。  
粘性あり、しまり弱い。やわらかい土層。1mm以下の褐色粒、灰白色粒を  
わずかに含む。  
粘性あり、しまり弱い。黄色彩沢粒を極わずかに、5mm程度の褐色ブロック  
粒をわずかに含む。非常に強い。~5mm程度の褐色パミスも少量に含む。~3  
mm程度の灰白色粒を多く含む。黒色彩沢粒をまばらに含む。

第8図 4区土層断面図 (S=1/60)



第9図 4区SI1実測図 (S=1/30)



第10図 4区SI1出土遺物 (S=1/3)

火山軽石を含んだ著しく硬質な層であり、イワオコシ火山灰層あるいはアワオコシ火山灰層と考えられる。本調査区では既報層序Ⅷ層である始良丹沢火山灰層は確認されていない。

### 第3項 縄文時代

4区の調査ではVa層から縄文時代早期の遺物および集石遺構1基が確認された。他の時期の遺構・遺物は確認できておらず、表面採集もされていない。なお、明確な遺構としては認定していないもの、Va層では被熱痕跡を有する礫がまばらに確認された。これらは、集石遺構の使用に伴う散礫と考えられる。

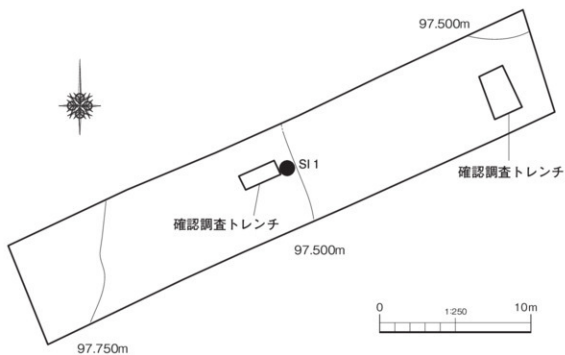
散礫は、砂岩を主体として尾鈴溶結凝灰岩を含み構成されており、その分布は遺物の分布と対応して大きく4つの群に分かれていることが確認できた(第1群～第4群)。第1群には集石遺構が含まれており、礫構成が同一なことより集石遺構と礫の分布は対応する可能性が高い。このことから、第2群～第4群の集石遺構が形成されていない群においても、同様な礫利用があった可能性は考慮しておく必要がある。なお、Vb層においても礫は出土しているが、焼礫はみられず、主に標高の低い東側でのみ出土していることから、流れ込みの可能性が高い。

### 第1目 検出遺構

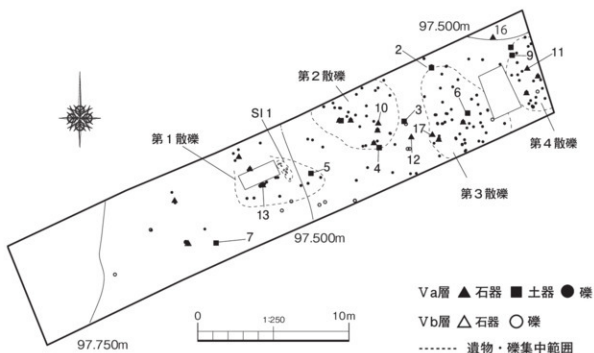
#### 集石遺構(第9図、第10図)

SI1 Va層上面で、東西に150cm、南北に40cmの範囲にわたる礫の集合を確認した。掘り込みは伴わない。礫は10～15cm程の砂岩で構成されており、数点は被熱していた。構成礫は僅かではあるものの、被熱痕のある礫を含むこと、他の散礫と比較して礫がまとまることから集石遺構と認定した。なお、西側に隣接する確認調査トレンチ近辺では、SI1の構成礫と同様な砂岩が散在していた。これらは元来SI1の構成礫あるいは同一用途の礫であった可能性がある。なお、西側の方が標高が高いことから、流れ込み等の自然移動というよりも人為的な礫の移動が伴っていた可能性が高い。

SI1から磨石(1)が1点出土している。砂岩を用いた磨石で1/3が欠損している。両面に磨面が認められ、先端部から稜線にかけて敲打痕がある。側面から裏面の一部にかけて被熱している。



第11図 4区遺構分布図 (S=1/250)

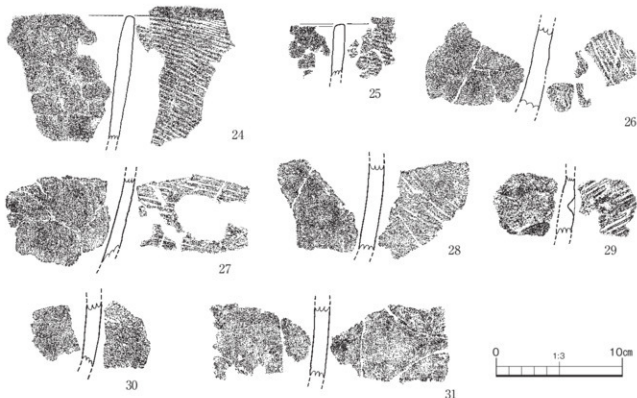


第12図 4区V層遺物・礫出土状況 (S=1/250)

## 第2目 出土遺物

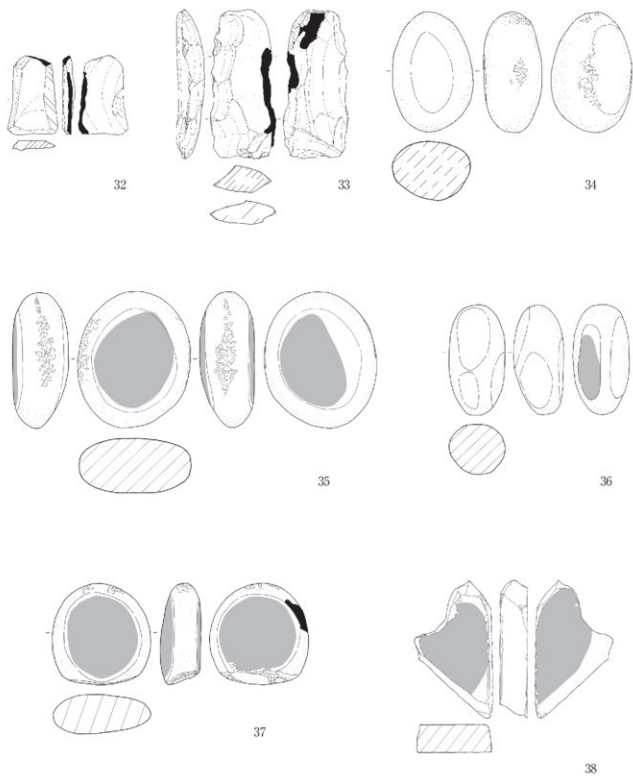
遺物はVa層から主に出土している。Ⅳ層掘削後にVa層の上面および下層、Vb層で遺物をとりあげた。もっとも、Va層の上層と下層では明確な時期的相違は認められず、Va層下とVb層出土遺物の層位的な確実性に乏しかったので、ここではV層出土の遺物として一括で報告する。層位情報は観察表に掲載している。掲載資料以外の搬入際も含めた遺物の総出土量の内訳は、土器16点、石器17点（ホルンフェルス6点、砂岩6点、赤色頁岩1点、頁岩2点）である。

土器は16点中8点を報告する（24～31）。24は口縁部～胴部片で外面に左上がりの貝殻条痕、内面はミガキ調整が認められる。貝殻条痕は、口縁部近辺の作業単位幅が25mm前後に対して、胴部寄りには45mm以上と相違がある。25は口縁部片で外面に貝殻条痕、内面はナデ調整である。胎土は脆い。26は胴部片である。左上がりの貝殻条痕、内面はミガキが認められる。27は胴部片で、外面に左上がりの貝殻条痕、内面はミガキ調整が認められる。28は胴部片で、外面は貝殻条痕後にナデ消しており、内面はミガキ調整されている。外面に長さ10mm、幅1mm～3mmの圧痕がある。29は胴部片で外面は貝殻条痕で内面はナデ調整をしている。中央に外面から6mm程の深さの未貫通の2次穿孔痕が認められる。穿孔時の土器表面の剝離を除けば、先端部1mm以下、最大径10mm程の工具が用いられたとみられる。穿孔部の裏面にあたる土器内面は、穿孔部に対応する部分を中心に表面の一部が剝離している。30は、胴部片で内外面ミガキで調整されている。ミガキの単位幅は4mm～7mmとまばらである。31は無文土器の胴部片で、内外面ミガキが部分的に認められる。



第13図 4区M・V層出土遺物実測図（1）（S=1/3）





第14図 4区M・V層出土遺物実測図(2)(S=1/3)

石器は加工・使用痕跡の確認できた7点を報告する(32～38)。32はホルンフェルス製の剥片である。33はホルンフェルス製の打製石斧である。表面には自然面を多く残し、左側面は荒い剥離で仕上げている。右側面は破損していて不明である。刃部は裏面に大きな剥離面があるが、打点が明瞭でなく、使用に伴う欠損の可能性が高い。34～37は磨石で、全て砂岩を利用している。34は部分的に弱い磨面が認められる。わずかに敲打痕も確認できる。全体的に被熱しており、煤が付着している。35は両面に磨面が認められる。頂部が湾曲している表面は、平坦な裏面に比べて磨面が著しい。湾曲面を主に使用していたと考えられる。36は部分的に弱い磨面が認められる。先端部には僅かに敲打の痕跡も確認できる。37は両面に磨面が確認できる。1/5を欠損しているが、剖面にも敲打痕が確認でき、欠損後も剖面を利用し敲石として転用あるいは併用したと考えられる。被熱しており、部分的に煤が付着している。38は砂岩製の台石である。大部分を欠損している。側面は一部自然面を残すが、その他は直線的に加工されている。使用面は、両面共に凹のない顕著な磨面が認められる。表面には側面縁の一部に(磨)面が形成されており、意図的に縁の部分も利用されていたと考えられる。また、裏面の一部ではやや黄色みがかかったテカリが認められる。

第3表 4区出土石器観察表

頁番号	回番号	掲載番号	出土層位	器種	部位	色 調				調整	焼成	胎土(上:下:量)					備考
						外面		内面				A	B	C	D	E	
						外面	内面	外面	内面								
14	13	24	Va	深鉢	口縁部	灰黄褐 10YR5/2	灰黄褐 10YR5/2	ナテ 貝殻燻痕	ミガキ	良好	～2 少	1 多			2 多		
		25	Va	深鉢	口縁部	褐灰 7.5YR4/1	にぶい褐 7.5YR6/3	ナテ 貝殻燻痕	ナテ	良好	1 少	1 多					
		26	Va	深鉢	胴部	褐灰 7.5YR4/1	黄灰 2.5YR4/1	貝殻燻痕	ミガキ	良好	～2.5 少	～1 多					
		27	Va	深鉢	胴部	にぶい黄橙 10YR6/3	灰黄褐 10YR5/2	貝殻燻痕	ミガキ	良好	5 多				1 少		
		28	Va	深鉢	胴部	にぶい黄 7.5YR6/4	褐灰 7.5YR4/1	ナテ 貝殻燻痕	ミガキ	良好	2.5 多	1 少	1 少		1 多		
		29	Va	深鉢	胴部	にぶい褐 7.5YR5/3	にぶい赤褐 5YR4/3	貝殻燻痕	ナテ	良好	3 多	1 少	1 僅		微多 1 少	穿孔は未 貫通	
		30	V	深鉢	胴部	にぶい黄 7.5YR5/4	灰黄褐 10YR5/2		ミガキ	良好	2 少	1 少			1 多	1 少	
		31	Va	深鉢	胴部	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10Y6/4		ミガキ	良好	3 少	1 多			2 多		

※胎土 A:宮崎小石 B:長石・石英 C:輝石・角閃石 D:雲母 E:パミス

第4表 4区出土石器観察表

頁番号	回番号	掲載番号	出土層位	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
12	10	23	Va	磨石	砂岩	9	5.9	3.4	259	敲石としても使用 被熱痕跡あり
15	14	32	Va	剥片	ホルンフェルス(1)	6.35	4.05	1.05	28	
		33	Va	石斧	ホルンフェルス(1)	11.95	5.25	2.3	165	
		34	V	磨石	砂岩	9.7	4.2	4.7	388	
		35	Va	磨石	砂岩	10.85	8.95	4.35	616	表面の使用が顕著 側面を敲石としても使用
		36	Va	磨石	砂岩	8.75	4.5	4	215	先端部を敲石として使用
		37	V	磨石	砂岩	8.1	7.85	3.15	310	敲石としても使用
		38	Va	台石	砂岩	14.55	8.35	2.95	472	
		39	Va	撥入礫	ホルンフェルス(1)	12.8	9.4	4.5	803	縦割状に加工が入る

本書で用いる石材の名称について

・ホルンフェルス(1):表面の色調は黒味または灰褐色であり、粒子が粗いもの

・ホルンフェルス(2):表面の色調は褐色または灰褐色であり、磨減の著しいもの

その他、写真掲載のみであるが、くびれ部に2本の平行する節理が沈線状に廻るホルンフェルス礫が1点確認された(39)。線自体は人為的な要素はないものの、搬入礫の中ではひときわ大きく他の搬入礫とは異質なため、意図的に持ち込まれた可能性を考慮して報告する。

#### 第4項 小 結

4区は既報である5区の南に隣接しており、5区と同様にV層から縄文時代早期の遺物・遺構が確認された。5区で検出されたVI層上面検出の遺構は確認されていない。なお、他調査区でわずかながら出土している古墳時代以降の遺物は表面採集や表土中でも確認されていない。ここでは、4区で確認された縄文時代早期の様相を述べ小結としたい。

縄文時代早期はV層において集石遺構1基と散礫および少数の遺物が確認された。集石遺構は構成礫が僅かであり、同様に構成礫が少ない3区の集石遺構より散漫である。もっとも、遺跡の西側を除く調査区全体にはSI1構成礫と同様に砂岩や尾鈴溶結凝灰岩を中心とした礫が散在しており、第3項ではその関連性についても言及した。1) SI1と同様な礫の広がりや位置的関係から、集石遺構と周辺散礫に関して有機的なつながりがあること、2) 散礫が密な部分には遺物も集中する傾向にあり、その分布は主に4つの群に分かれることである。

上記の様相の評価に関しては、一調査区の様相のみから導きだすのは難しいものの、考古学的解釈としては以下のことが考えられる。a) 集石遺構とその周辺散礫および遺物の分布が重なる範囲は、これらの礫利用に伴う行動の結果を示すものである可能性があること、b) SI1自体に掘り込みがなく、構成礫数も貧弱であることを考慮すると、集石遺構が確認されていない3つの散礫群においても、SI1を含む第1群散礫と同様な行為のもとで形成された可能性があることである<sup>1)</sup>。以上のように捉えられるならば、4区で確認された散礫と遺物の分布は、複数回の礫利用に伴い形成された結果であることを想定しておく必要がある。

次に遺物の様相をみていく。V層出土の土器は他調査区の様相と同様に、外面に貝殻条痕文を施し、内面をミガキ調整で仕上げる別府原式土器(24~30)を主体として、無文土器が1点(31)出土している。このことから、遺跡の中心となる時期は概ね縄文時代早期前葉と捉えられ、集石遺構や散礫も本時期に帰属すると考えられる。

石器は搬入礫も含めて全体で23点と少なく、中でも製品は8点とわずかであり、石器製作に伴うような剥片石器はほとんど認められず、製品も欠損品が主であることに特徴がある。中でも、磨石は5点中3点が被熱しており、SI1の(23)のように礫利用への転用が考えられる。以上のような出土遺物の様相は、4区が日常的に道具が用いられた場所ではなく、磨石の転用例などから焼礫利用における転用目的あるいは偶発的な廃棄によって持ち込まれたことを示すものと考えられる。

以上のことから、4区は永尾遺跡の中でも日常的に用いる安定的な空間とは認識されておらず、掘り込みを伴わない簡便な焼礫利用などが散発的におこなわれていた場であったと評価できる。その要因は、2区、3区、5区が位置する台地の縁に対してやや内側に入り込んでいる立地と関連があったと考えられ、永尾遺跡の南側縁辺と認識されていた可能性がある。

<sup>1)</sup> もっとも、これらの散礫は流れ込みによる偶然性を完全に排除できないが、北側に隣接する5区では4区との境界部付近で礫はほとんど出土していないこと、第1群散礫はSI1を中心として標高の高い西側にも散在していることを考慮すると、人的な礫の移動が散礫の主な形成要因であった蓋然性の方が高い。

## 第3節 6区の調査

### 第1項 調査の概要

調査区の中で最も西に位置する。調査区内の地形は変化に乏しいが、中央から西側はほぼ平坦であり、東へは僅かに下り勾配となる。

調査はまず、バックホウにより表土を除去するところから開始した。この際、調査区東側においてアカホヤ火山灰層の残存を確認したため遺構検出を行った。結果として層の大半は攪乱であり遺構は検出されなかったが、層中より縄文時代後期や古墳時代の遺物の混入を確認した。調査はその後、人力にて縄文時代早期の遺物包含層の掘削作業に移行した。その結果、集石遺構を3基検出したほか、縄文時代早期の遺物を確認した。

中央より西側は、調査前に人為的掘削が行われており、縄文時代早期の遺物包含層は既に消失し、小林降下軽石層や更に下位のローム層を確認した。そのため旧石器時代の堆積状況、及び出土遺物の有無を確認するために北壁にトレンチを設定し掘り下げた。掘削の結果、最終的に硬質の黄褐色火山灰層まで到達したが、石器や焼礫等、旧石器時代に関連する遺物は認められなかった。

### 第2項 基本層序

調査区内の土層堆積は、I層:表土、II層:攪乱層、III層:アカホヤ火山灰層、IVa層:明褐色ローム層、IVb層:褐色ローム層、Va層:暗褐色ローム層、Vb層:褐色ローム層、VI層:小林降下軽石層、VII層:小林降下軽石下位ローム、VIII層:明褐色ローム層、IX層:硬質の黄褐色火山灰層に分けられる。堆積層は、基本的に4区と同様である。

### 第3項 縄文時代早期の調査

#### 第1目 検出遺構

調査区中央付近、最も標高が高い位置において、集石遺構が3基隣接した状態で検出された。遺構を構成する礫は、半分近くが尾鈴溶結凝灰岩であり、残りを砂岩、変成岩が占める。

SI2 調査区中央よりやや西側にある。100cm×100cmの範囲に礫が分布する。礫は比較的北側に密集しており、南側は疎らであるほか、南西部においては径20cmの範囲において空白部分が存在する。礫を取り除くと径約100cm、深さ約10cmのやや歪な楕円形の掘り込みが検出される。礫は2段にわたって認められるが、配石は明確に認められない。遺構内の礫は円礫が被熱により1/2もしくは1/4に分割したものが多く、10cm前後の比較的大ぶりの礫も少なくない。

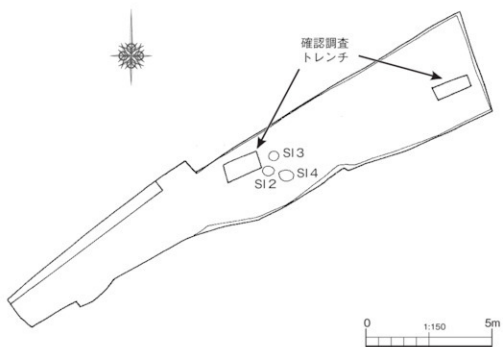
遺構内出土遺物 4Iは無文土器である。傾きから胴部下半にあたると思われる。器壁が薄く、焼成が良好であることなど、本遺跡から主に出土した別府原式土器とは明らかに異なった特徴を持つ。4IIは磨石である。楕円形を呈する。表面はもろく、僅かながら全面に研磨痕が見られる。

SI3 調査区の中央部にあり、3基の中では最も北に位置する。礫の分布は70cm×60cmの範囲であり、他に比べて小ぶりである。遺構内の礫はSI2と同様に大ぶりのものが多い。検出時の礫を取り除いたところ、掘り込みは認められなかった。

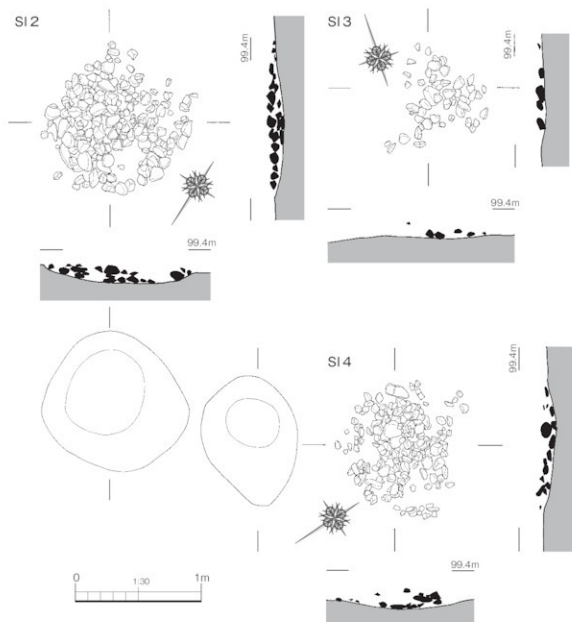
SI4 調査区の中央部にあり、3基の中では最も南に位置する。礫の分布は90cm×80cmの範囲である。礫の分布は中央部に密集し、外側は外周を縁取るように分布する礫が認められるもの



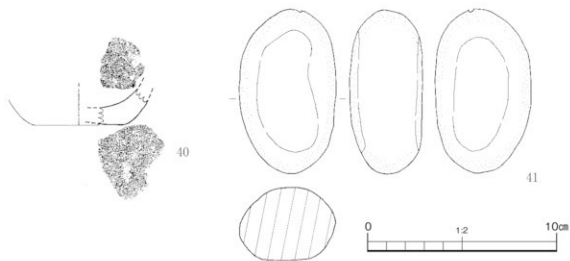
第15図 6区周辺地形図 (S=1/3000)



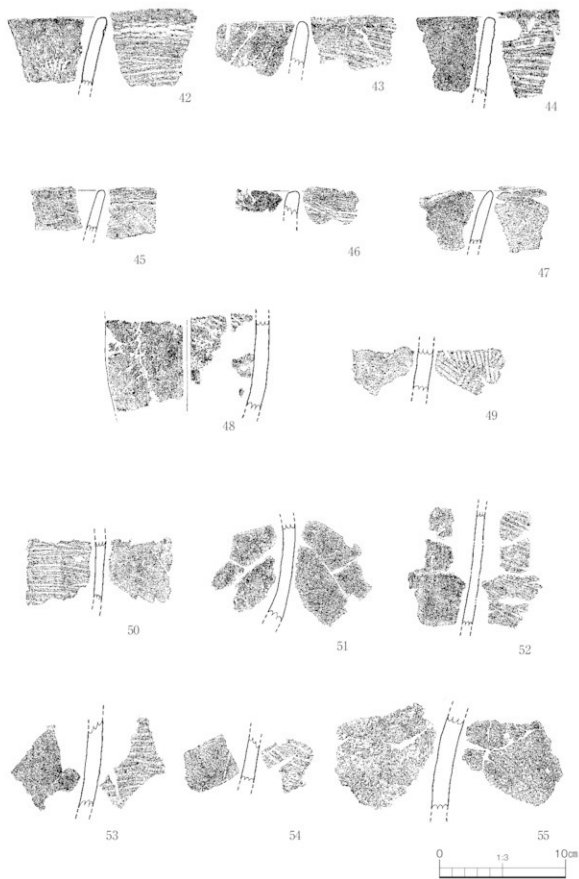
第16図 6区遺構分布図 (S=1/150)



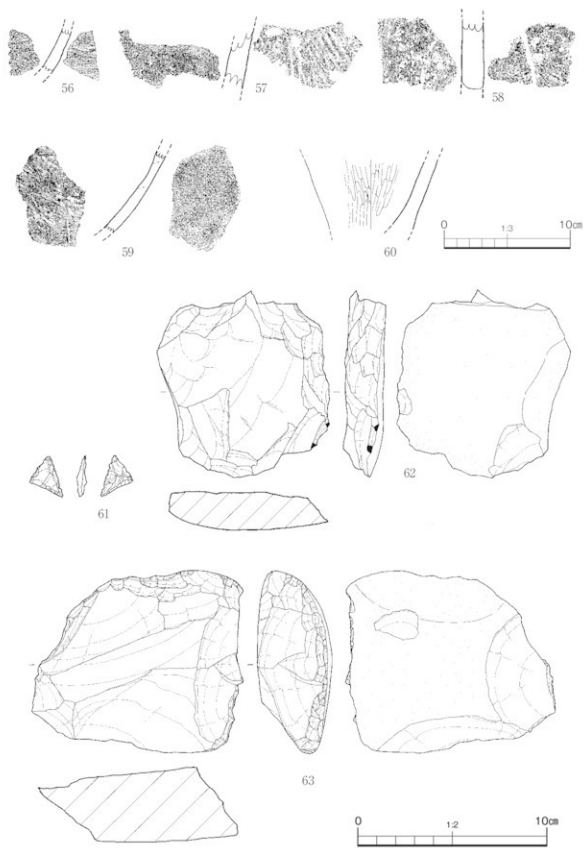
第17图 6区遺構実測図 (S=1/30)



第18图 6区SI1内出土遺物実測図 (S=1/2)

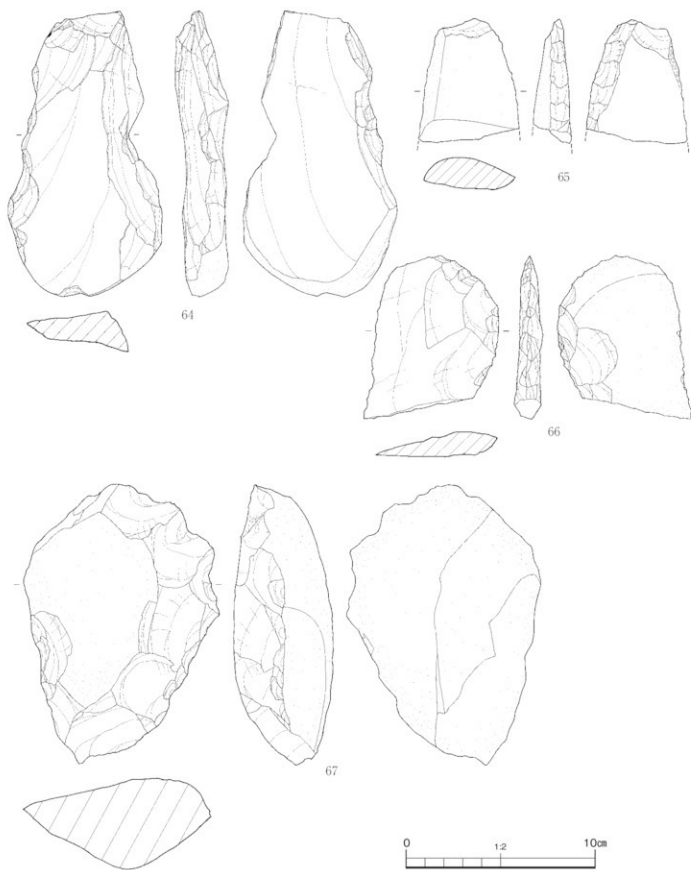


第19図 6区IV・V層出土遺物実測図(1)(S=1/3)

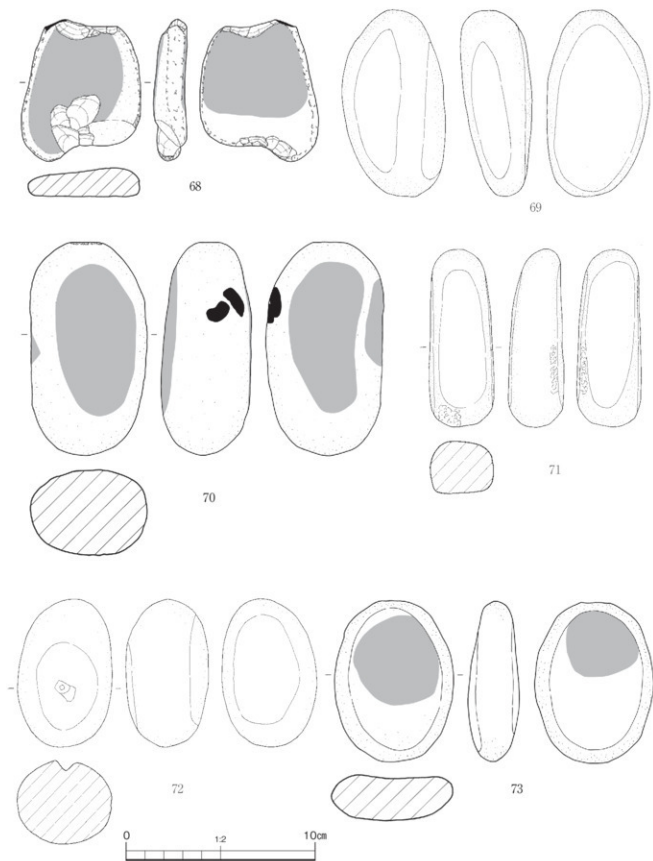


第20图 6区IV·V层出土遗物实测图(2)(56~60: S=1/3·61~63: 1/2)

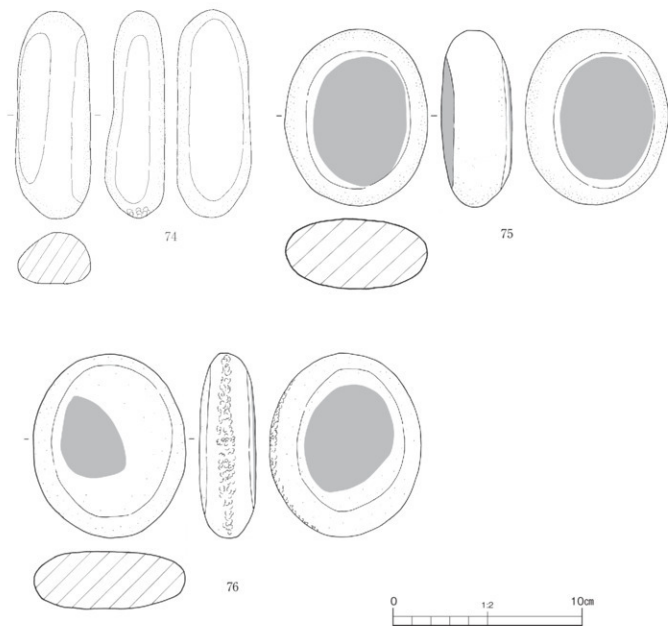




第21図 6区Ⅳ・Ⅴ層出土遺物実測図(3)(S=1/2)



第22图 6区IV·V层出土物实测图(4)(S=1/2)

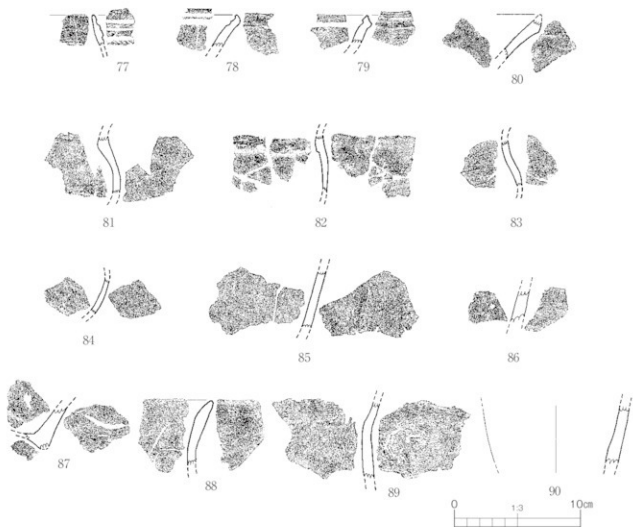


第23図 6区N・V層出土遺物実測図(5) (S=1/2)

の、全体的に疎らである。遺構内の礫は大ぶりのものもあるが全体的に5cm以下の、熱により破碎した礫が多い。礫を除去したところ、わずかな落込を検出した。

## 第2目 出土遺物

42～60は土器である。大半は外面に斜方向ないしは横方向の貝殻条痕を持ち、内面はナデを行う。このような特徴は縄文時代早期前葉の別府原式土器の特徴である。43～47は外面の口縁



第24図 6区攪乱層出土遺物実測図 (S=1/3)

直下に貝殻縁線刺突を行わないほか、48、51、54は外面調整にナデが行われる。60は底部であり、外面にケズリを多用するが、これも別府原式土器の特徴である。なお、59は無文の胴部と思われる。内外面共にナデが行われており、器形、胎土、焼成共に他の個体とは大きく異なることから、当時北部九州で主体的であった押型文、捺糸文などの強い影響の下に製作された土器と考えられる。

61～76は石器である。61は、不規則に剥離した黒曜石の剥片を利用して、縁辺部を成形加工した石鏃である。小型で挟りが浅いタイプに属する。黒曜石は桑ノ木津留産と考えられる。片脚部を折損している。62～67はスクレイパーである。62・63は剥片剥離を行いながら礫面近くまで後退した残核の側縁に礫面側からの打撃によって刃部を設ける。64は、同一方向からの連続的な剥片剥離の過程で作出した薄手の剥片を素材とし、両縁に剥離を加えながら刃部を作出する。65は、細長い板状の自然礫の側縁を利用して刃部を設けている。66は剥片剥離の初期工程で礫面除去を行った際に作出された薄手の剥片を素材として剥片上部を刃部としている。67は、角礫を素材として縁辺に大まかな剥離を連続的に行い、刃部を設けている。68は、円礫の

上下に両側から加撃し挟り部を設けたものであり、石錘と判断される。しかし平坦部は磨耗していることから、別の用途である可能性も残す。68～76は磨石・敲石である。70・71・74は、先端部に敲打痕が認められることから叩石としても利用されたと考えられる。また33は礫の中央が窪んでおり、凹み石としても利用されたと考えられる。73・75・76は表面の磨耗から磨石と考えられる。

#### 第4項 縄文時代早期以降

包含層は後世の攪乱を受けていたため、遺構および遺物包含層は確認されなかったが、攪乱層の掘削時や地表面から遺物を採集した。

77～87は縄文時代後期の遺物である。77は口縁直下に沈線を横走させ、沈線間に微細な単沈線を羽状に施文するものであり、鳥井原式に比定される。口縁が内湾することから鉢形土器と考えられる。78は外反する口縁の内面に沈線を2本施文する。79は沈線が一本になったものであり、断面が角になるよう成形したものである。41は内面施文は行わず、外反する口縁を断面三角形にした個体である。81～83は胴部上半である。81・82は頸部と胴部の境界部の内面が分厚くなるが、83ではそれが見られない。84・85は胴部下半である。87は底部である。底面は上げ底を呈する。

88・89は古墳時代の土師器である。いずれも甕と考えられる。90は近世の陶磁器である。

#### 第5項 小 結

縄文時代早期は集石遺構が3基検出された。掘り込みはうち2基から検出されたがいずれも浅く、配石等の下部構造を伴わないものである。一方、別府原遺跡で卓越していた炉穴は本調査区では全く検出されなかった。これは、南側の傾斜地に形成された別府原遺跡と、僅かに北側に傾斜した本調査区と言う地形の違いが影響したと考えられる。調査区からは石錘と考えられる石器(75)が出土した。南九州の縄文時代早期では通常含まれない器種であるため貴重な事例であるが、平坦面に研磨痕があるなど典型例とは異なる。他の類例はないか、今後検討が必要であろう。

縄文時代の遺物としては、ほかに後期の遺物も少量ながら確認された。時期は西平式の後半から御領式と考えられる。器面のミガキが発達する時期であるが、本調査区から出土した遺物はミガキが見られず、ナデが主体であることから、多くは搬入品ではなく、宮崎平野内で製作された模倣品の可能性が高い。

なお、古墳時代の遺物も少量確認された。層の残存状況から遺構は検出できなかったが、1区における古墳時代の集落に関連するものと考えられる。

第5表 6区出土土器観察表

頁番号	図番号	持取番号	出土層位	器種	部位	色調		調整		焼成	胎土(上:mm, 下:量)					備考	
						外面	内面	外面	内面		A	B	C	D	E		
20	18	40		深鉢	底部	にぶい黄褐色 10YR7/3	灰黄褐色 10YR4/2	ナデ	ナデ	良好	1多						SI2/4
21	19	42	Va	深鉢	口縁部	にぶい褐色 7.5YR5/3	暗灰黄 2.5Y5/2	貝殻条痕文	ミガキ	良好	2少	1多		1少			
		43	Va	深鉢	口縁部	褐色 7.5YR4/1	にぶい褐色 10YR5/3	貝殻条痕文	丁寧なナデ	良好	1少	2多					
		44	IVa- IVb	深鉢	口縁部	灰黄褐色 10YR5/2	にぶい黄褐色 10YR5/3	貝殻条痕文	ミガキ	良好	1少	1多					
		45	IVa	深鉢	口縁部	にぶい黄褐色 10YR5/3	灰赤 2.5YR4/2	ナデ	工具ナデ	良好	3多	微少			微少		
		46	IVb	深鉢	口縁部	灰褐色 7.5YR4/2	にぶい褐色 7.5YR6/4	ヨコナデ	ナデ	良好	4少	1多					
		47	一括	深鉢	口縁部	にぶい赤褐色 5YR5/4	にぶい赤褐色 5YR5/4	ナデ	ナデ	良好	3微	微多					
		48	Va	深鉢	胴部	にぶい黄褐色 10YR5/3	暗灰黄 2.5Y5/2	ナデ	ナデ	良好	3多				微多		
		49	Va	深鉢	胴部	褐色 7.5YR4/3	灰褐色 7.5Y4/2	貝殻条痕文	丁寧なナデ	良好	2少	1多					
		50	IVb	深鉢	胴部	にぶい褐色 7.5YR5/4	にぶい褐色 7.5YR5/3	貝殻条痕文	ミガキ	良好		1多					
		51	IVb	深鉢	胴部	にぶい褐色 7.5YR5/3	黒灰 10YR4/1	ミガキ	ミガキ	良好	1微	2多					
		52	IVb	深鉢	胴部	にぶい褐色 7.5YR5/3	灰白 5YR4/1	貝殻条痕文	タテミガキ	良好	2多	1少					
		53	Va	深鉢	胴部	灰黄褐色 10YR5/2	暗灰黄 10YR4/1	貝殻条痕文	ミガキ	良好		1多					
		54	IVb	深鉢	胴部	にぶい褐色 7.5YR5/4	にぶい黄褐色 10YR5/3	ナデ	ナデ	良好	5多	1多				微多	
		55	IV	深鉢	胴部	明褐色 7.5YR7/3	暗灰黄 2.5Y5/4	縄文	ナデ	良好		微多	1微				
22	20	56	IVa	深鉢	胴部	明赤灰 2.5YR3/1	褐色 7.5YR4/3	ハラミガキ	丁寧なナデ	良好	1微						
		57	IVb	深鉢	胴部	にぶい褐色 7.5YR5/3	灰褐色 7.5Y5/2	ナデ	ミガキ	良好	1少	微多	1微		1少		
		58	Va	深鉢	胴部	にぶい黄褐色 10YR6/4	にぶい黄褐色 10YR6/3	ナデ	ナデ	良好		1多					
		59	IVa	深鉢	胴部	暗赤褐色 5YR3/2	灰褐色 5YR4/2	ナデ	工具ナデ、 指押さえ	良好	1.5微				1少		
		60	Va	深鉢	胴部	にぶい赤褐色 5YR5/4	黒褐色 10YR3/1	ミガキ	ミガキ	良好	1少	1多			微多		
26	24	77	一括	鉢	口縁部	にぶい黄褐色 10YR6/7	にぶい黄褐色 10YR6/3	沈線・キザミ	ナデ	良好		1少					
		78	一括	深鉢	口縁部	にぶい赤褐色 5YR4/3	にぶい赤褐色 5YR5/4	ナデ→ミガキ	沈線→ミガキ	良好	2多	1少					
		79	一括	深鉢	口縁部	にぶい褐色 7.5YR5/3	にぶい褐色 7.5YR5/4	横ナデ	ハラミガキ	良好	2少	1少					
		80	一括	深鉢	口縁部	灰褐色 5YR4/2	にぶい赤褐色 5YR4/3	横ミガキ	ミガキ	良好	2少		1微				
		81	一括	深鉢	胴部	にぶい赤褐色 5YR5/4	にぶい赤褐色 5YR5/3	ミガキ	ミガキ	良好	1.5多						
		82	一括	深鉢	胴部	にぶい褐色 7.5YR5/3	赤褐色 5YR4/6	ミガキ	ナデ	良好	1.5微		1微		微少		
		83	一括	深鉢	胴部	褐色 5YR4/1	にぶい赤褐色 5YR5/3	横ミガキ	ミガキ	良好	1少						
		84	一括	深鉢	胴部	にぶい赤褐色 5YR4/3	にぶい赤褐色 5YR4/3	ナデ	ナデ	良好	5多	1多					
		85	一括	深鉢	胴部	灰褐色 7.5YR4/2	にぶい赤褐色 5YR5/4	ミガキ	ナデ	良好	3少	3多					
		86	一括	深鉢	胴部	にぶい褐色 7.5YR5/3	褐色 2.5Y4/1	タテミガキ	丁寧なミガキ	良好	5少						
		87	一括	深鉢	底部	にぶい褐色 7.5YR5/3	にぶい褐色 7.5YR5/3	タテナデ	ナデ	良好	2少	1少	1微				
		88	一括	壺	口縁部	灰褐色 7.5YR4/2	にぶい赤褐色 5YR5/3	ヨコナデ	ナデ	良好		2少					
		89	一括	壺	胴部	にぶい褐色 7.5YR5/3	にぶい黄褐色 2.5Y5/3	工具ナデ	横ナデ	良好		1多			微微		
		90	一括	壺	胴部			輪蓋	回転ナデ	良好							備前焼

※胎土: A:宮崎小石 B:長石・石英 C:輝石・角閃石 D:雲母 E:バミス

第6表 6区出土石器観察表

掲載頁	図番号	掲載番号	出土層位	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
20	18	41	SI1内	磨石	砂岩	8.7	5.1	3.85	236	
22	20	61	IVb	石鏃	黒曜石	1.7	1.2	0.4	1.0	
		62	IVa	スクレイパー	ホルンフェルス(1)	7.4	6.9	1.6	114.0	
		63	Va	スクレイパー	ホルンフェルス(1)	7.3	8.4	3.0	147.0	
23	21	64	Va	スクレイパー	ホルンフェルス(2)	11.4	6.2	2.2	134.0	
		65	一括	スクレイパー	ホルンフェルス(1)	49+a	4.1	1.3	35.0	
		66	一括	スクレイパー	ホルンフェルス(1)	6.5	5.4	1.1	39.0	
		67	Va	スクレイパー	ホルンフェルス(1)	11.7	7.4	4.0	314.0	
24	22	68	IVa	石鏃	砂岩	7.6	6.4	1.8	105.0	
		69	IVb	鋭石	砂岩	9.8	5.4	3.6	265.0	
		70	一括	鋭石	砂岩	11.3	4.3	4.8	507.0	
		71	IVb	鋭石	砂岩	9.4	3.4	2.8	148.0	
		72	IVa	凹石	砂岩	7.9	5.0	4.4	247.0	
25	23	73	IVa	磨石	砂岩	6.5	6.3	2.8	199.0	
		74	一括	鋭石	砂岩	11.0	4.0	3.3	179.0	
		75	一括	磨石	砂岩	9.3	7.3	2.7	367.0	
		76	VI	磨石	砂岩	9.8	8.1	3.0	325.0	

本書で用いる石材の名称について

- ・ホルンフェルス(1) : 表面の色調は黒味または灰褐色であり、粒子が粗いもの
- ・ホルンフェルス(2) : 表面の色調は褐色または灰褐色であり、磨滅の著しいもの

## 第三章 総括

本遺跡の主体は縄文時代早期である。出土石器はほぼ別府原式土器である。これは、先に報告された2区、3区、5区と共通しており、別府原式期、本遺跡全体で集落が営まれていたと考えられる。別府原式土器の標識遺跡である別府原遺跡は本遺跡と同じ尾根筋に当たることから、本遺跡は別府原遺跡の強い影響を受けて形成されたと考えられる。その一方で、別府原遺跡で300基以上も確認された炉穴は、2区で確認された1基において、その可能性が考えられるのみである。別府原遺跡で確認された炉穴は、南側の斜面地に集中して作られることから、平坦ないし北側へと下る傾斜地に当たる本遺跡は、炉穴を構築する上で立地上適さなかったと考えられる。

また、6区からは縄文時代後期の遺物も確認された。時期は西平式土器以降である。宮崎平野はこの土器以降縄文系土器の出土量が増えるが、大淀川以北の事例が少なかったため貴重な出土資料と言える。特に、この中に在地の納屋向式が含まれないことは注目に値する。

このほか、1区からは古墳時代の堅穴建物も検出された。周辺の平野部には横穴墓で構成される佐土原村古墳や、土器焼成土坑を伴った集落である宮ヶ迫遺跡等の調査事例はあるものの、丘陵上の集落については確認例が乏しいだけに、集落の存在が確認されたことは興味深い発見となった。

写真図版







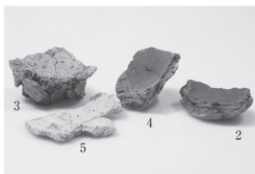
1区 調査区全景 (北西から)



1区 SA1・SA2 完掘写真 (南西から)



1区 調査区全景 (北東から)



1区 出土遺物 ①



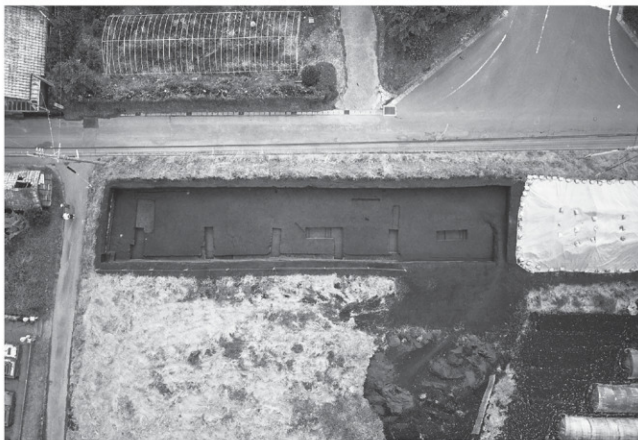
1区 出土遺物 ②



1区 出土遺物 ③



1区 出土遺物 ④



4区 調査区全景 (真上から)



4区 調査区東壁 (西から)



4区 調査区南壁 (北西から)

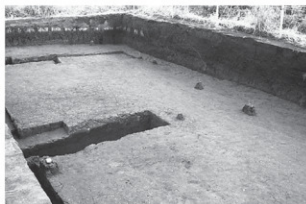


4区 V層下位の土層断面

図版4



4区 Va層遺物および礫出土状況(北西から)



4区 Vb層礫出土状況(北西から)



4区 SI1検出状況(南東から)



4区 SI1周辺散礫(南東から)



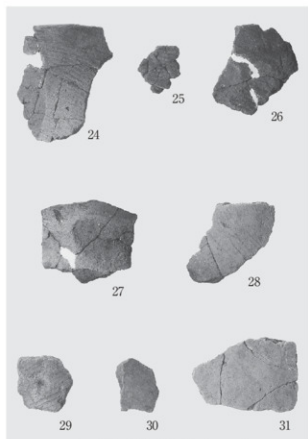
4区 搬入礫出土状況



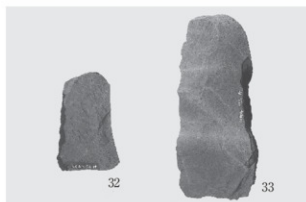
4区 調査風景



4区 調査区完掘状況(西から)



4区 縄文時代早期土器 (24~31)



4区 縄文時代早期石器



4区 縄文時代早期石器 (参考資料)



4区 縄文時代早期石器 (23・34~38)



6区 調査区全景



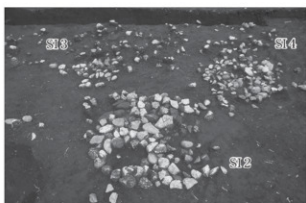
6区 調査区土層断面



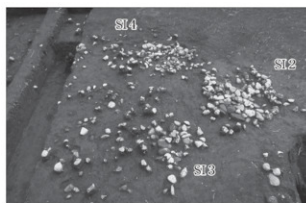
6区 III層検出状況



6区 V層集石遺構検出状況 (北西から)



6区 集石遺構検出状況 (西から)



6区 集石遺構検出状況 (北から)



6区 礎検出状況 (西から)



6区 礎検出状況 (北東から)



6区 調査区北壁 (東部) 土層断面 (南から)



6区 調査区北壁 (西部) 土層断面 (南東から)





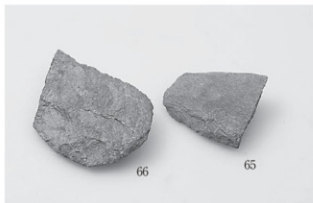
6区 縄文時代早期出土石器 (1)



6区 縄文時代早期出土石器 (2)



6区 縄文時代早期出土石器 (1)



6区 縄文時代早期出土石器 (2)



6区 縄文時代早期出土石器 (3)





6区 縄文時代早期出土石器 (4)



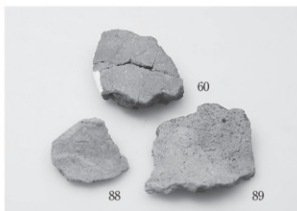
6区 縄文時代早期出土石器 (5)



6区 縄文時代早期出土石器 (6)



6区 縄文時代早期以降出土石器 (1)



6区 縄文時代早期以降出土石器 (2)

※60は縄文時代早期

# 報告書抄録

ふりがな	なごいせき						
書名	永尾遺跡（1区・4区・6区）						
副書名	西春田仲間原線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名	宮崎市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第117集						
編著者名	金丸武司 大嶋昭海 川野誠也						
発行機関	宮崎市教育委員会						
所在地	〒880-2101 宮崎市大字跡江4200番地3						
発行年月日	2017年3月						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査原因	種別
なごいせき 永尾遺跡	宮崎県宮崎市 佐土原町西上那珂	45201	11-045	32°02'49" 付近	131°24'16" 付近	道路拡張	散布地
	調査期間	調査面積	主な時代	主な遺構	主な遺物		
永尾遺跡1区	2013.5.7 ～ 2013.5.17	56㎡	縄文時代 古墳時代	竪穴建物	縄文土器、石斧、剥片類 土師器		
永尾遺跡4区	2014.11.5 ～ 2014.12.25	270㎡	縄文時代	集石遺構 散磔	縄文土器、磨石、石斧、剥片類		
永尾遺跡6区	2015.8.19 ～ 2015.10.24	400㎡	縄文時代	集石遺構	縄文土器、石鏃、石斧、剥片類		
(概要) 縄文時代早期の集落址。集石遺構4基検出。別府原式土器や石鏃、石斧・磨石が出土。ほかに縄文時代後期の土器。古墳時代の竪穴建物2軒、土師器を確認した。							

宮崎市文化財調査報告書 第117集

永尾遺跡  
(1区・4区・6区)

西春田仲間原線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2017年 3月

発行 宮崎市教育委員会

